第２章　不就業者の分析：ウェッブ個人調査

前章の分析で、現時点での幸せ度を問うたところ、不就業者のそれは就業者と同程度であり、就業者のうちの非正社員と比べれば、むしろ幸せ度が高いことが示された。しかし、就業者にいくつかのタイプがあったことと同様に、不就業者にもいくつかのタイプがあることが想定できる。ここで注目したいのは、高齢の不就業者だからといって、その人が職業生活からの引退を決意しているとは限らないということである。現時点では不就業だが、近い将来の就業復帰を考えている人もいるだろうし、引退したと言ってもその決意は不本意なものであるので、事情が許せば仕事に復帰したいと考えている人もいるかもしれない。無論、当然ではあるが、充実感と喜びに満ちた引退生活を過ごしている人もいるはずである。同じ不就業者であっても、このような違いがあるとすれば、その違いに応じた問題点の整理や対策が必要になるだろう。

この章では、このような想定のもとで不就業者をいくつかのタイプにわけ、それぞれのタイプがどのような状況にあるのかを明らかにし、今後の高齢者雇用政策を考える際の基礎資料としたい。なお、この章で分析する高齢不就業者は、前章と同じウェッブ調査のデータで、50 歳代に 5 年以上の正社員としての勤務経験があり、現在、首都圏在住の 60 歳代の不就業者 2,000 人である。

１節　不就業者の４タイプとその属性

１．４タイプの抽出

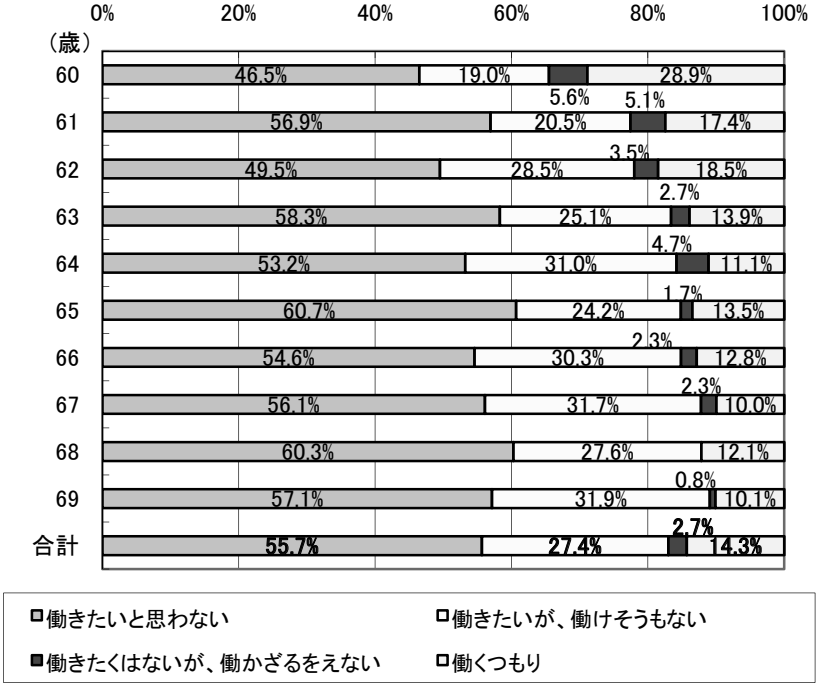
上記のように、同じ不就業者と言っても、人々は多様な背景を抱えていて、感じ方や行動様式も異なっている。そこでまず、不就業者自身の、これからの就業に対する考えに応じて、いくつかのタイプ分けをしよう。

調査では、不就業者（2,000 件、100.0%）に対し、これから「働くつもりか否か」に関する設問をしている（Q34）。結果は、「働きたいと思わない」が 55.7%（1,113 件）と過半数を占めたが、「働きたいが、働けそうもない」が 27.4%(547 件)、「働きたくはないが、働かざるをえない」が 2.7%（54 件）、そして「働くつもり」が 14.3%（286 件）であった。自発的か否かはともかくとして、働く意向を示している不就業者が 2 割弱いることになる。不就業の高齢者の中にも、働く意向のある人が少なくないことが確認できる。

図表Ⅴ-2-1-1 には、年齢別に見たこの結果を示してある。年齢が高くなるに従い、「働くつもり」という割合は、概ね減少している。他方、「働きたいと思わない」はそれだけではわかりにくいが、「働きたいが、働けそうもない」も含めて「働かない人」とすると、その割合は逆に年齢が高くなると増加する傾向にある。つまり、年齢が高くなると就業意向は減少する

とみて良い。ただしここで留意する必要があるのは、60 歳代後半層でも 10%以上の人が「働くつもり」と答えているということである。逆に 60 歳前半層でも「働かない」人は 7～8 割に達している。就業意向は年齢だけで決定されるわけでもない。

図表Ⅴ-2-1-1　不就業者の4タイプ



このような異なる就業に対する考えは、それぞれどのような人が抱いているのだろうか。また就業に対する考えの違いは、これからの就業行動や生活面での行動のどのような違いをもたらすのだろうか。これらを明らかにするために、以下では、この設問によって分けられる不就業者の 4 つのタイプ別に、分析を進めていく。

なお、本章では以下、煩雑さを防ぐために、「働きたいと思わない」は「働かない」と表記し、「働きたいが、働けそうもない」は「働けそうもない」、「働きたくないが、働かざるをえない」は「働かざるをえない」、そして「働くつもり」はそのまま「働くつもり」と、それぞれ表記する。

２. タイプ別の属性

4 つのタイプが、どのような人々で構成されているか、タイプ別の個人属性の構成を示したものが図表Ⅴ-2-1-2 である。なお、以下の図表で枠が太線となっているセルは、4 つのタイプの中で、数値が大きいあるいは小さいなど、特徴的な箇所である。

平均年齢は、「働かない」と「働けそうもない」の 2 タイプが共に約 65 歳で、他の 2 タイプ

より高い。図表Ⅴ-2-1-1 で見たような、年齢が高いほど就業意欲が低下するという関係と符合する結果である。なおこの図表には、この調査回答者の中では年齢が若い方である 60 歳前半層の割合も示してある。平均年齢が最も低い「働かざるを得ない」タイプでは、その割合が 72.2%とかなり高くなっている。

図表Ⅴ-2-1-2　不就業者タイプ別の個人属性

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
平均年齢:歳	64.9	65.1	63.2	64.0	64.8
60～64歳の割合:%	44.7%	42.6%	72.2%	56.6%	46.6%
男性割合:%	88.1%	82.6%	88.9%	89.9%	86.9%
大卒以上比率:%	61.0%	50.3%	50.0%	55.2%	57.0%
健康な人の割合:%	86.2%	72.8%	88.9%	91.7%	83.4%
自宅(ローンなし)保有率:%	88.2%	77.3%	64.8%	76.6%	83.0%
平均年間所得:万円	388.3	306.9	246.4	348.3	356.5
所得のうちの年金の割合:%	80.4	82.7	66.0	77.6	80.3
定年経験ありの割合:%	86.1%	82.3%	79.6%	87.1%	85.0%

「健康な人の割合」とは、調査で健康状態について 4 段階で問うた回答が、「健康」または「まあ健康」であった割合である。「働くつもり」では、これが 91.7%と高い。それに対して、「働けそうもない」では 72.8%に留まっている。就業意向は、「健康問題を抜きに語れない」と言えよう。また、その次の行の「自宅（ローンなし）保有率」では、「働かない」が 88.2%と高くなっている。老後生活の安心をもたらす住宅確保ができている人は、働かなくなると言えそうである。なお平均年間所得も、この「働かない」タイプでは、388 万円と高くなっている。このタイプは、フローで見てもストックでみても、経済的には豊かな層と言えよう。

２節　これまでの職業キャリアと不就業理由

１.50 歳代の仕事

タイプ別に 50 歳代の主な仕事についての回答結果を示したものが、図表Ⅴ-2-2-1 である。雇用形態に関しては、「正社員」がいずれも高いが、調査対象者の設定条件からすると当然の結果であるので、ここではむしろ、経営者や会社役員の割合が興味を引く。その割合は「働かざるを得ない」は 0%であるのに対し、他はいずれも約 10%を占めている。職位に関しても、「社長・役員等」の割合は、「働かざるを得ない」では 0%であるが、他は 10～20%となっている。勤務先の企業規模に関しては、「働かない」と「働くつもり」という両極が、共に 5,000 人以上の大企業が 35%を占めている。それに対し「働かざるを得ない」タイプのこの割合は、18.5%と少なく、このタイプでは逆に 30 人以下が多くなっている。つまり、「働か

ない」や「働くつもり」というタイプは、いずれも大企業で職位の高かった人が多いのに対し、「働かざるを得ない」というタイプは、中小企業の人も多く、また職位が高くなかった人も少なくない。

このような違いは、50 歳代の年収の違いも生み出している。図表の最終行に示してあるように、1,000 万円以上であった人の割合は、「働かない」や「働くつもり」では、共に約 50%に達している。それに対し、「働けそうもない」や「働かざるを得ない」は共に 30%前後である。

図表Ⅴ-2-2-1　50 歳代の仕事（不就業者タイプ別）

	不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
雇用形態	経営者：%	1.8%	1.3%	—	2.4%	1.7%
	会社役員：%	9.7%	7.3%	—	10.5%	8.9%
	正社（職）員：%	83.5%	85.6%	88.9%	83.9%	84.3%
職位	社長・役員等：%	14.3%	11.2%	—	17.8%	13.6%
	部長クラス：%	33.5%	28.0%	35.2%	32.9%	32.0%
	課長クラス：%	24.5%	21.9%	24.1%	26.2%	24.1%
企業規模	30人以下：%	7.1%	11.0%	16.7%	7.7%	8.5%
	1,0001～5,000人：%	22.0%	23.6%	18.5%	20.3%	22.1%
	5,000人以上：%	35.4%	24.1%	18.5%	35.0%	31.8%
最高年収	1,000万円以上：%	51.7%	34.7%	27.8%	45.5%	45.5%

「働かない」や「働くつもり」という人は、少なくとも経済的にはかなり恵まれた 50 歳代を過ごしたと言える。

２. 前職からの離職

このような人が前職を離職したのはいつごろだろうか。図表Ⅴ-2-2-2 に示したように、「働かない」や「働けそうもない」では、「5 年以上前」に前職を辞めた人が 40%前後を占めている。そうでなくとも 1 年以上前に辞めたという人はかなり多い。他方、「働かざるを得ない」や「働くつもり」という人は、1 年以内という人がかなりいるし、3 カ月以内という人も少なくない。因果関係は断定できないが、離職期間が長い人は就業意欲が低い。

ともあれ、この図表からは、前職を辞めた理由は「定年（または雇用期間満了）」という人が、タイプに関係なく過半数を占めていることがわかる。ただし、その時点で「もう引退しようと考えた割合」は、タイプにより大きな違いを見せている。「働かない」という人は実に 80%がそう考えていたのに対し、「働くつもり」や「働かざるを得ない」という人は、その割合が 20%に満たないからである。

前職を離職した時点で、「働かない」という人の多くは、その意思を決めていたとみて良い。

図表Ⅴ-2-2-2　前職の離職について（不就業者タイプ別）

	不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
1ヵ月以上働いていた前職を離職したのは	3ヶ月くらい前までの間	1.9%	1.3%	7.4%	10.8%	3.2%
	3ヶ月から半年前までの間	1.2%	1.3%	5.6%	5.6%	2.0%
	半年から1年前までの間	7.0%	5.9%	24.1%	13.6%	8.1%
	1年前から2年前までの間	13.4%	15.0%	22.2%	24.5%	15.7%
	2年前から3年前までの間	12.2%	15.5%	11.1%	12.2%	13.1%
	3年前から5年前の間	21.6%	21.6%	13.0%	12.6%	20.1%
	5年以上前	42.8%	39.5%	16.7%	20.6%	38.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
[前職の離職理由]						
	定年（または雇用期間満了）	65.6%	61.4%	64.8%	67.8%	64.8%
[前職離職時点の考え]						
	もう引退しようと考えた	80.0%	33.5%	13.0%	16.4%	56.4%

３.現在、不就業である理由

では、これらの人々が現在、働いていない理由は何だろか。項目を示し、「あてはまる」から「あてはまらない」まで４段階で回答を求め、「あてはまる」の点数が大きくなるような1～４点でポイント化し平均点を求めたものが、図表Ⅴ-2-2-3 である。

図表Ⅴ-2-2-3　現在、働いていない理由（不就業者タイプ別）

ポイント

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
これまでに、充分働いてきたから	3.58	2.84	2.57	2.85	3.25
病気、または健康に自信がないから	1.54	1.90	1.57	1.38	1.62
仕事能力が低下してきたから	1.56	1.76	1.65	1.35	1.59
自分に向いた仕事が見つからないから	1.78	2.50	2.93	2.42	2.10
経済的には、働く必要がないから	2.93	2.14	1.59	2.24	2.58
仕事以外の活動をしたいから	2.56	2.15	1.83	2.15	2.37
働くことを、一時的に中断した状態だから	1.22	1.54	2.11	2.05	1.45

注：「ポイント」は、「あてはまらない」を１点、「どちらかと言えばあてはまらない」を２点、「どちらかと言えばあてはまる」を３点、「あてはまる」を４点として算出。

「働かない」という人は、「これまで充分働いてきた」し、「経済的には、働く必要がなく」、また「仕事以外の活動をしたいから」と答えている。それに対し、「働けそうもない」という人は、他のタイプと比べると相対的に、「病気、または健康に自信がないから」と「仕事能力が低下してきたから」という理由を強調している。他方、「働かざるを得ない」人が今働いていないのは、「経済的には、働く必要がない」ということではなく（ポイントが小さい）、「自分に向いた仕事がみつからない」ので、「働くことを、一時的に中断している」と答えている。

また、「働くつもり」だが現在働いていない人は、「病気、または健康不安」というわけではなく、「仕事能力が低下してきた」のでもない。「働くことを、一時的に中断している」に過ぎないとしている。

３節　現在の活動および幸せ度

１. 現在の活動

不就業状態にあるこれらの人は、現在、どのような活動に時間を割いているのだろうか。5 項目を示し、それぞれについて、割いている程度を尋ねた。割いている時間の程度が高い方のポイントが大きくなるような 1～4 点で示した結果が、図表Ⅴ-2-3-1 である。合計を見ると、「インドアの趣味（読書、パソコンなど）」の時間程度が高く、次いで「アウトドアの趣味(ゴルフや散歩、ドライブなど)」、そして「家事」と続いた。「ボランティア、社会奉仕」や「家族や親類などの介護・介護補助」という活動は、ポイントが 2.0 に満たないことから、時間を割いている人は少ないと言える。このような傾向は、不就業者タイプによっても、ほとんど違いが見られない。違いがあるのは、「働かない」という人が、「アウトドアの趣味」に、他のタイプより多くの時間を割いていると答えている点である。

図表Ⅴ-2-3-1　活動別の割いている時間程度（不就業者タイプ別）

ポイント

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（547）	働かざるを得ない（54）	働くつもり（286）	合計（2,000）
アウトドアの趣味（ｺﾞﾙﾌ、ドライブなど）	3.04	2.65	2.37	2.77	2.87
インドアの趣味（読書、パソコンなど）	3.43	3.32	3.37	3.37	3.39
ボランティア、社会奉仕	1.78	1.72	1.52	1.85	1.77
家族や親類などの介護・介護補助	1.54	1.54	1.56	1.51	1.54
家事	2.63	2.68	2.69	2.56	2.64

注：「ポイント」は、「割いていない」を 1 点、「あまり割いていない」を 2 点、「まあ割いている」を 3 点、「割いている」を 4 点として算出。

ところで、これらの人の現在の生活は、以前働いていた時と比べて、その人をどの程度満たしているだろうか。調査では、「時間面の忙しさ」と「精神面の充実度」それぞれについて、その程度を 5 段階で尋ねている。1～5 点で点数が大きい方が、「今の方が忙しい」または「今の方が充実している」ことを表わしているが、選択肢は肯定側と否定側が対称でないので、「現在と同程度」が 4.0 である。

時間面では「あまり忙しく」ないが、精神面では「以前ほどではないが、結構充実している」というのが、大まかな水準である。ただし、「働かない」という人のポイントは 3.68 で、むしろ「以前と同程度に充実している」に近い。このタイプは、活動に割いている時間程度

も高かったことら、積極的な活動を展開していると考えることができる。

図表Ｖ-2-3-2　就業時と比べた活動の評価（不就業者タイプ別）

ポイント

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
時間面の忙しさ	2.47	2.23	2.17	2.41	2.39
精神面の充実度	3.68	2.98	3.00	3.15	3.40

注：「ポイント」は、「まったく忙しくない（または、まったく充実していない）」を 1 点、「あまり忙しくない」を 2 点、「以前ほどではないが、結構忙しい」を 3 点、「以前と同程度に忙しい」を 4 点、「今の方が忙しい」を 5 点として算出。

２. 幸せ度スコア

これらの人々に、100 点満点で、現在の幸せ度を記入してもらった結果が、図表Ｖ-2-3-3 である。「働かない」という人は 80 点を越え、極めて高い。それに対し、「働かざるを得ない」という人は 60 点である。後者のタイプの人数は決して多くないが、何らかの対策が必要なことが示唆される。

図表Ｖ-2-3-3　幸せ度スコア（不就業者タイプ別）

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
幸せ度自己評価：100点満点	81.08	70.72	60.19	73.70	76.63

４節　これからの仕事と暮らし

１．今後、働いても良いと思う仕事の内容

調査では、「働かない」という人も含めて、いくつかの仕事の内容を示し、「そういう仕事なら働きたい」という考えに対し、どの程度あてはまるかを４段階で尋ねた。あてはまり度が高いと数値が大きくなる 1～4 点にポイント化した結果が、図表Ｖ-2-4-1 である。ここで、あてはまり度が中位となるポイントは 2.5 である。特徴としては、全項目で「働かない」という人のポイントが低い。当然の結果ではある。

それ以外のタイプでは、次のようなことがいえる。「働けそうもない」という人が働いても良いと思うのは、「体の負担が少なく」、「時間の制約も少ない仕事」である。健康への不安がやや多かったこのタイプの特徴だろう。それに対し「働かざるを得ない」という人も、この 2 つを指摘するが、同時に「これまでの経験を活かせる仕事」を強調している。既述したよ

うに、このタイプの人が現在不就業の理由の 1 つとして、「自分に向いた仕事がみつからない」を回答していた。そのことと合わせて考えると、これまでの経験を活用できる仕事がなかなか見つからないことが、これらの人を不就業者にしているようだ。なお「働くつもり」の人も、「これまでの経験を活かせる仕事」を働きたい仕事として、多く指摘している。

図表Ⅴ-2-4-1　今後、働いても良いと思う仕事（不就業者タイプ別）

ポイント

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（547）	働かざるを得ない（54）	働くつもり（286）	合計（2,000）
これまでの経験を活かせる仕事なら	1.97	2.93	3.11	3.20	2.44
仕事の進め方を任せてくれるなら	1.79	2.51	2.50	2.70	2.14
自分が成長できる仕事なら	1.81	2.50	2.48	2.72	2.15
社会的意義がある仕事なら	2.17	2.75	2.69	2.93	2.45
友人・知人と一緒にできる仕事なら	1.68	2.12	2.24	2.17	1.89
体に負担が少ない仕事なら	2.10	3.05	3.11	2.85	2.49
時間の制約が少ない仕事なら	2.35	3.04	3.20	2.95	2.65
収入が多い仕事なら	1.85	2.46	2.94	2.61	2.15

注：「ポイント」は、「あてはまらない」を 1 点、「どちらかと言えばあてはまらない」を 2 点、「どちらかと言えばあてはまる」を 3 点、「あてはまる」を 4 点として算出。

では、これらの不就業者は健康という条件があれば、何歳ぐらいまで働くと考えているだろうか。回答の結果が、図表Ⅴ-2-4-2 である。さすがに「働かない」という人は、「わからない」や、現在の年齢より若い「64 歳まで」という回答が多い。このタイプを除くと、いずれも 60 歳代後半層はもちろんのこと、70 歳前半層までとする回答も多くなっている。不就業者とはいえ、「働かない」と明言した人を除くと、より高齢期までの就業意欲がある。

図表Ⅴ-2-4-2　健康なら何歳まで働くか（不就業者タイプ別）

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（547）	働かざるを得ない（54）	働くつもり（286）	合計（2,000）
64歳まで	18.0%	6.4%	5.6%	5.6%	12.7%
65～69歳まで	20.0%	30.5%	31.5%	33.2%	25.1%
70～74歳まで	8.8%	30.5%	31.5%	29.0%	18.3%
75～79歳まで	3.2%	7.7%	9.3%	10.8%	5.7%
80歳以上	6.0%	7.1%	5.6%	11.9%	7.2%
わからない	43.9%	17.7%	16.7%	9.4%	31.1%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

２. これからの主な暮らし方

最後に、これらの不就業者が、これからどのようにして暮らしていこうと考えているかを見よう。図表Ⅴ-2-4-3 がその結果である。

図表Ⅴ-2-4-3　これからの主な暮らし方（不就業タイプ別）

不就業者タイプ（件数）	働かない（1,113）	働けそうもない（ 547）	働かざるを得ない（ 54）	働くつもり（ 286）	合計（2,000）
企業などで働く	0.2%	2.0%	22.2%	16.1%	3.6%
NPOやボランティアの仕事にかかわる	6.4%	11.9%	5.6%	17.5%	9.5%
自分で仕事をはじめる	0.4%	2.0%	11.1%	10.8%	2.7%
シルバー人材センターを通して働く	0.6%	6.4%	20.4%	16.4%	5.0%
趣味に時間を費やす	62.4%	45.5%	20.4%	23.4%	51.1%
家族と過ごす	20.2%	20.1%	7.4%	6.3%	17.9%
特に考えていない	9.7%	12.1%	13.0%	9.4%	10.4%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

「働かない」という人は、「趣味に時間を費やす（62.4%）」という回答が極めて多く、次いで「家族と過ごす（20.2%）」が多い。「働けそうもない」という人もこの 2 つが多いが、「NPO やボランティア」を指摘する人が 10%を上回っている。決して大きな数値ではないが、このタイプでは一定の人数が、このような活動を選択肢に含めていることがわかる。

「働かざるを得ない」人も、「趣味」を 20.4%の人が答えているが、むしろ「企業などで働く（22.2%）」の方が多いし、同時に「シルバー人材センターを通して働く（20.4%）」という回答も多い。働かざるを得ないから当然ではあるが、多様な就業パターンを視野に入れている。しかし、「NPO やボランティアの仕事」は少ない。

他方この項目は、「働くつもり」という人が 17.5%と、4 つのタイプの中では最大である。このタイプの中では、「趣味」が最も回答が多いものの、それに次ぐ回答項目である。図表Ⅴ-2-4-1 を再び見ると、このタイプが働いても良いと思う仕事として、「社会的意義のある仕事」を 4 つのタイプの中では最も高い数値になっていることに気づく。

NPO やボランティアの必要性は指摘されるが、なかなかそれを始める人は少ないようである（第Ⅲ部第 3 章参照）。対象者をうまく設定すれば、これらの活動が積極的に展開されることも期待できる。

５節　まとめ

この章では、ウェッブ調査データのうちの「不就業者」について分析した。その際、同じ不就業者であっても、これからの就業意向の違いよって対策の内容や必要度は異なることを考慮し、不就業者をタイプ分けし、分析を進めた。その不就業者のタイプを、その構成割合と共に示すと、「働きたいと思わない（55.7%）」、「働きたいが、働けそうもない（27.4%）」、「働きたくないが、働かざるを得ない（2.7%）」、そして「働くつもり（14.3%）」の４つであった。

分析の結果明らかになった、4 つのタイプを要約しよう。

「働きたいと思わない」という人は、大企業出身者が多く、経済的には恵まれた状態にある人であった。前職を離職した時点で職業生活からの引退を考えた人が多く、現在働いていないのは、「これまでに、充分働いてきた」し、「経済的には働く必要がなく」、また「仕事以外の活動をしたい」からである。現在は、インドア・アウトドアの趣味などで積極的に活動し、精神面でも充実している。現在の幸せ度も高い人である。

「働きたいが、働けそうもない」という人は、健康面で不安を抱えている人がやや多くなっていた。４つのタイプの中では、平均年齢もやや高くなっている。「体に負担が少ない仕事」や「時間の制約が少ない仕事」ならば働いても良いという考えも多少抱いてはいるが、これからは仕事でなく、趣味をしたり、家族と過ごしたりして、生活していきたいと考えている。

「働きたくないが、働かざるを得ない」という人は、60 歳前半層の人が 7 割以上を占め、４つのタイプの中では、最も若い年齢構成となっていた。住宅の保有率がやや低く、規模が比較的小さな企業の出身者も少なくない。現在は、「自分に向いた仕事が見つからない」ので、「働くことを一時的に中断した状態」と答えている。これからは、「これまでの経験を活かせる仕事」を探しているが、企業のみでなく、「シルバー人材センターを通して働く」ことも考えている。人生の幸せ度が最も低かったのは、このタイプである。

そして「働くつもり」という人は、健康な人が多く、大企業出身者が多くなっていた。「働かざるを得ない」という人と同様に、「これまでの経験を活かせる仕事」に就きたいと考えているが、同時に「社会的意義がある仕事」にも魅力を感じている。そのために、「NPO やボランティアの仕事」にも関心を寄せているタイプである。

このように同じ高齢の不就業者といっても、決して一様ではないことが明らかになった。「働きたいと思わない」という人は、幸せな悠々自適の老後生活を送っているようである。この割合が、今回の分析では最も高かったことは喜ぶべき結果である。しかし、今後もこのような高い割合を維持できるかは不確かである。

ともあれ、これ以外の３つのタイプは、「働きたいが、働けそうもない」という人も含めて、何らかの形で職業生活との関連を願っている人たちである。しかも、これらの人は「健康」という条件に制約がなければ、70 歳を越えても働きたいと答えていた。これらの人々の、就業に対する意欲や関心を満たせるようにすることが、高齢者の社会参加を促すという観点からも必要である。

なお、それらの３つのタイプの中では、「働きたくないが、働かざるを得ない」という不就業者は、幸せ度も低く問題があることが示唆された。今回の分析では、幸せ度の低さをもたらしている要因までは分析していない。しかし、「これまでの経験を活かす仕事」を望んでいるものの、高齢者になって新たに仕事を探すと、その実現可能性が乏しいことに気づかされ、そのことがこのような結果を招いているように思われる。このタイプの割合が高くなかったことは、幸いである。しかし、このような人が少数だが、確実にいることも明らかになった。

このように見ていくと、60 歳代の不就業者にも、就業機会を提供できるような政策を展開することが必要なことが示唆させる。高齢期の不就業者のうち約 4 割の人は、仕事との関わりに関心を抱いていたからである。なおその際、NPO やボランティア活動など、従来の「就業」という枠を越えて、環境の整備を行うことが求められる。実際、「働くつもり」という人の中には、そこに関心をある人も少なくなかったからである。

（永野　仁）